

クマにおどおどした日々のこと

OWCC 中川和道 20260219

その1. あれは1972年9月のことだったっけ? 当時流行っていた「韋駄天山行」をやった。加藤文太郎の真似をして、単独で寝袋を持たず地下足袋、食料は1日1食ツェルト泊、3泊4日で剣岳から西穂高まで、かつ飛び山行。荷物は8kgだった。ラーメンの夕食を食べ日がまだ高く暖かいうちにツェルトをかぶって眠る。寝袋がない夜は苦しく、寒くなって夜中に必ず目が覚めた。ラジオに火をつけ力強い音に励まされながらお湯を沸かし暖かくなったらまた眠った。

クマ騒動が起きたのは双六小屋でツェルトを張った夜。テント場にひとりだけでテント泊するという中川に小屋スタッフが驚いた顔で「クマが出た情報」を大声で伝えた。お金がない中川は仕方ないと一人で幕営。19時には就寝し21時にトイレに起きそのあとはぐっすり寝込んだ。

突然、「ガーッ、ガーッ」という獣の声。びっくりして目覚めた。クマか? 小屋の扉まで走ろう。30秒は必要だ。その時間をどう稼ぐか? おいしさにクマが目移りするものを投げてその間に走ろうかと思ったが、中川が持っていたのは、インスタントラーメンとクラッカー。これを投げたら、クマは、「いや、人間の方がおいしい」と向かって来るだろう。うーん、困った…。ラジオをつけ、ツェルトの端っこ(小屋の反対側)に置いた。もう、走るしかない、心臓がばくばくだ。ツェルトのファスナーをそーっと開き、暗闇で地下足袋をはき、いざ、スタートダッシュ、という、その時だ。獣が、「ガーッ、ガーッ」のあと「ゴホン、ゴホン」と咳をするではないか! ヒトだ! 半信半疑でライトを向けたその先に真っ赤なソロ天があるじゃないか! 何と、22時以降にやってきたソロ登山者がソロ天を張っていたのである。早発ち早着きを叩き込まれていた駆け出し登山者の中川は、こういう反則登山者に初めて出会ったのであった。

翌日、朝日より早くに一番で歩き始めた中川は、小動物の内臓が食い散らされ、50mにわたって散乱した登山道を槍ヶ岳へと歩いた。内臓はどれも新しく、たった今やられたものばかりだった。本当に怖い思いをした。

その2. 2015年5月、松田明博さんと剣岳八つ峰VI峰Aフェース中大ルートを登った帰りだった。ハシゴ段乗越を下ったあたりで、でっかい獣の足跡に出会った(写真)。10cmくらいあるだろうか、こりゃクマだ。足跡は新しく、左足の2つの間にある右足は強く雪面をけて、左にターンしていた。それから1時間の行程は、2人とも、本当に怖かった。

だだっ広い雪原だった。いざクマに出会ったらどうしようかと思ったが、いい案は浮かばず、ひたすら下山を急いだ。幸い、クマには会わなくて下山でき、事なきを得た。

クマには、やっぱり、出会わないのがいちばんだ。

